

【学力向上フロンティテスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道県名	大分県
------	-----

I 学校の概要(平成 15 年 4 月現在)

学校名	国東町立国東小学校								
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	0	12	20
児童数	52	56	59	52	50	72	0	341	

実践研究の概要

1. 研究主題

『自ら考え,自ら行動できる子どもの育成をめざして』 「算数科の問題解決的な学習過程における,チーム・ティーチング(TT)のあり方 ～きめ細かな支援と評価のあり方を求めて～」
--

2. 研究内容と方法

(1)実施学年・教科

<p>全学年・算数</p> <p>平成 14 年度からの少人数などきめ細かな指導に係わる(TT)加配 3 名を低・中・高の各学年に配属し,学級担任と協力支援体制を組み,基礎・基本の確実な定着を図るとともに成就感を味わうことのできる指導法の工夫・改善に力を入れてきた。</p> <p>教科については,系統約に積み重ねていく特性を持ち,学年が進むにつれ習熟の差が付きやすい算数科を取り上げ,児童の学習能力や個性の伸長を図るために,授業の質的改善,個に応じた指導方法の工夫に努めてきた。</p>
--

(2)年次ごとの計画

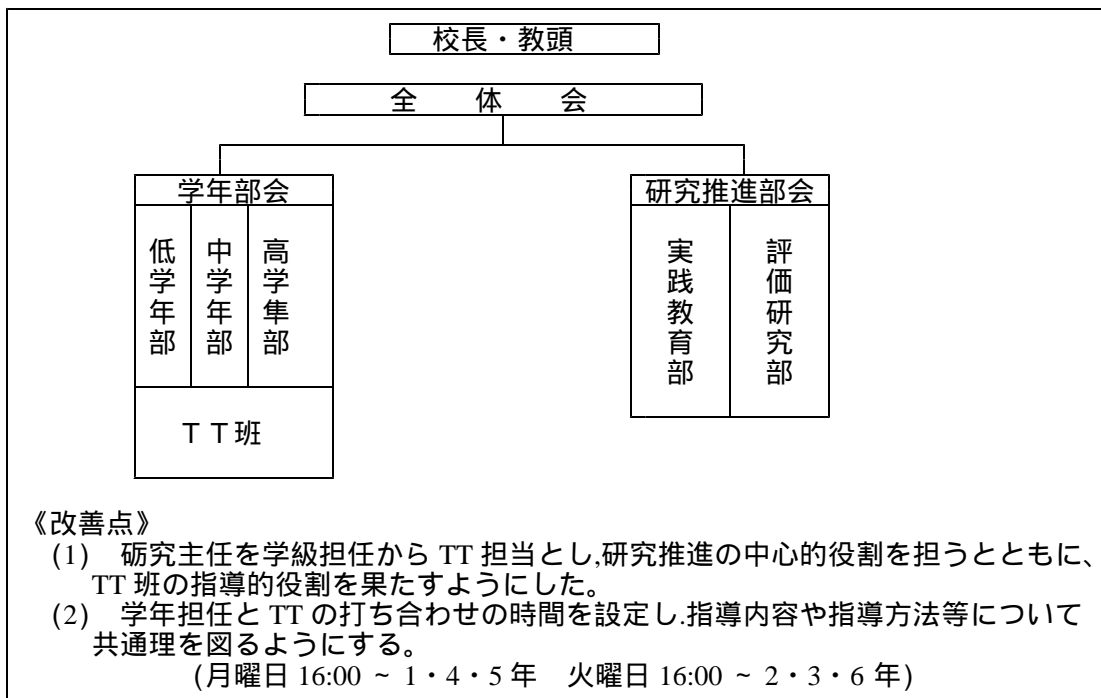
<p>テーマ 「チーム・ティーチング(TT)指導による授業構想」 ～算数科の問題解決的な学習過程における,きめ細かな支援(評価)のあり方～</p>

平成14年度	<p>仮説 算数科の問題解決的な学習過程において,複数教師(TT)による指導制で 個に応じたきめ細かな支援(指導・援助)を行う きめ細かな支援を行うための適切な評価を工夫・改善する そうすれば,子どもが育つであろう。</p> <p>研究内容・方法</p> <p>(1)指導方法の工夫改善 (2)評価を生かした指導の改善 (3)教材,評価基準等の研究や開発</p> <p>算数科の問題解決的な学習過程における協力的指導 TT と少人数指導(TS)の位置付け</p> <p>* 単元全体の指導計画で * 1 単位時間での指導で ・「つかむ段階」及び「ふかめる段階」の TT ・「さぐる段階」及び「ひろげる段階」の TS</p> <p>評価を取り入れた TT の指導のあり方</p> <p>* 診断的評価 * 形成的評価 * 到達度評価 * つまずき調査と回復指導</p> <p>教科学習を支える基礎学力の定着</p> <p>* K1(興味講書),K2(漢字),K3(計算),K ゲーム(補充・発展)の導入</p>
--------	--

平成15年度	<p>テーマ 算数科の問題解決的な学習過程における,チーム・ティーチング(TT)のあり方 ～きめ細かな支援と評価のあり方を求めて～</p> <p>仮説 算数科の問題解決的な学習過程において,複数教師(TT)による指導体制で 個に応じたきめ細かな支援(指導・援助)を行う きめ細かな支援を行うための適切な評価を工夫・改善する そうすれば,子どもたちは自ら考え,意欲的に取り組むであろう。</p> <p>研究内容・方法《平成14年度に加えて》</p> <p>(1)習熟の程度に応じた指導 (2)標準学力検査による学力の把握と指導の改善</p> <p>児童の客観的学力の実態に基づいた指導方法や評価を研究するために設定した。</p> <p>教科担任制の導入については一部導入しているが,全学年の TT 指導や障害をもつ児童の支援の充実にも力をいれている。</p> <p>研究協議会の開催については,校内研究実践をもっと充実したことや多くの学力フロンティアスクール研究発表会に積極的に参加するとことで,特に実施しなかった。</p>
--------	---

平成16年度	<p>テーマ 平成15年度に同じ。(未定)</p> <p>研究の見通し 仮説は平成15年度に同じ。研究3年次の成果をまとめると共に公開研究会を開催し,研究成果の普及を図る。</p> <p>研究内容・方法《平成15年度に同じ》</p> <p>(1)3年次研究成果のまとめ(研究紀要作成) (2)公開研究発表会の開催(平成16年11月11日予定)</p>
--------	---

(3) 研究推進体制



平成 15 年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 基礎・基本の定着

ア、計算力の向上

つまずき調査を年 2 回実施し、個々のつまずきを把握するとともに、K3(朝の計算タイム)や K4(金曜日 6 校時)を中心につまずきの回復指導を行い、算数の基礎となる計算力の向上を図った。

例《5 年(49 名)の結果》}

実施月 得点	1 年生用		2 年生用		3 年生用		4 年生用	
	5 月	9 月	5 月	9 月	5 月	9 月	5 月	9 月
90 以上(%)	90	98	76	86	64	80	76	88
89 ~ 70(%)	10	2	22	12	22	12	18	8
70 未満(%)	0	0	2	2	14	8	6	4

イ、事後評価テストの向上

単元毎に内容の定着度を把握する事後評価テストの結果も徐々に良くなってきている。

例《6 年(72 名)の結果》

学期	評価	A (85 点以上)	B (84 ~ 60 点)	C (50 点未満)	平均点
1 学期		28 名(39%)	26 名(36%)	18 名(25%)	71.9 点
2 学期		39 名(54%)	26 名(36%)	7 名(10%)	81.4 点

(2)学習に対する意欲

児童の意識調査によると全体的に学習意欲の向上や学習習慣の定着が見られるようになった。

例《2年(56名)の結果 H16.2.2 調査》

算数の勉強は好きですか?

年度	項目	とても好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	とても嫌い
昨年度(H14年度)		27%	41%	20%	12%
本年度(H15年度)		52%	41%	7%	0%

例《4年(53名)の結果 H16.2.2 調査》

宿題をわすれずにできましたか?

年度	項目	きちんとできた	できた	時々できなかった	できなかった
昨年度(H14年度)		41%	45%	10%	4%
本年度(H15年度)		45%	47%	6%	2%

(3)多様な指導方法の改善

ア、TT指導だけではなく、グループ別指導や課題別指導・習熟度別指導も取り入れ、学力の定着や学習意欲の向上に効果を表してきている。

イ、遅れがちな児童のつまづきを予想し、一人ひとりにあった支援をすることにより、理解を深めることができた。

ウ、ひろげる段階では、その子の理解状況により問題を選択させ、発展的な問題にも意欲的に取り組む姿勢が見受けられた。

(4)教職員の意識改革

ア、お互いの指導を見合ったり、取り入れたりすることで、指導力の向上や教材研究の深まりが見受けられる。

イ、担任だけでなく、学年部全体で児童の指導にあたらうとする体制ができてきた。

ウ、客観的に児童の学力を把握することにより、特に遅れがちな児童への指導方法を工夫しようとする姿勢が高まっている。

2. 今後の課題

(1)学年部での指導法の打ち合わせや進度の調整の時間を設定していたが、まだ十分に活用されていない。

(2)算数の遅れがちな児童の基礎学力を高めるため、回復指導や支援方法をさらに工夫していく必要がある。

(3)学習内容や児童の実態にそって、TT指導や少人数指導・習熟度別指導等を効果的に位置付け、さらに指導方法を改善を図っていかねばならない。

学力等把握のための学校としての取組

(1)事前評価(診断的評価)...単元導入の前に関連する既習内容の理解度を診断し、本単元の指導計画の作成資料にする。

(2)事中評価(形成的評価)...単元の学習途中における児童の理解状況を把握し、個別指導の方策を探る。

(3)事後評価(到達度評価)...本単元で学習した内容の定着度を見るとともに、標準規準に照らし合わせて個々の児童がどの程度目標に到達しているかを診断し、本単元の補充学習や次の学習への指導に生かす。

- (4)つまずき調査...各学年ごとに精選した 10 問の計算問題で既習内容の定着度を調べ、回復指導に生かしていく。 実施時期(5月・9月)
- (5)回復指導 ...ア、事後評価後の補充学習の他に、単元終了後 2～3 週間の間隔を空け、水曜日の朝の時間を活用した K3 タイムで、再度定着度調べ、補充学習に生かす。
イ、つまずき調査で明らかとなった内容を K3 タイムで使用する問題に立ち返り、補充学習で既習内容を復習する。
- (6)標準学力検査...一年生を除く全学年で実施し、客観的に学力を把握すると共にその結果を分析・検討し、指導方法の改善を図る。
実施時期(平成 15 年度 2 月)
(平成 16 年度 5 月)

V フロントティアスクールとしての研究成果の普及

- (1)研究実践をまとめ紀要を他校や教育関係機関に配布したり、郡内研究主任会で本校の実践を発表したりしながら、研究成果の普及を図る。
- (2)保護者に対して、PTA 総会や全体会、役員会や学年(学級)懇談会、授業参観、あるいは「PTA 広報紙」等で説明や公開授業、広報を通して理解と協力を求めている。
- (3)学校評議員制度を活用して、地域の情報や意見を学校運営(校内研究)に取り入れ、授業公開をしたりして意見交流をしている。
- (4)校内授業研究会では、近隣の学校にも案内し研究の深化・充実を図っている。
- (5)他のフロントティア指定校より、研究紀要の送付や校内授業研究会への参加の問い合わせが寄せられている。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無